

からという1つの証明であるというふうにうれしくは思うんですけども、逆にいいますと世間が狭いというか、知っている人しか知らないというふうになっているという心配もあります。それはやはり、いろんな方法で拡大をしていかなければいけないと思いますので、多くの保護者の皆さんは、高専というのは非常に特殊な存在で、変わった人ばかりじゃないのといったような声も聞かれます。その辺はどうやって解決していけばいいのかと思わないでもないのですが、今日も企業の社長さんに来ていただいておりまして、高専のホームページのメッセージ欄に、企業の方のお話とか、あるいは学校の先生のお話とか、そういうものも是非入れさせていただきたいと思いますので、また改めてお願いすることがあるかもしれませんが、その節はぜひよろしくお願いいたします。

(吉見委員)

鈴鹿高専の卒業生の方に来ていただいております。採用させていただくという立場、あるいは就職をしていただくという立場から少しお話をさせていただくと、私どもはコンピューター関係の仕事を専門にやっておりますけれども、大学の卒業生と、高専の卒業生の方に対する期待を少し変えて採用させていただいています。大学、あるいは大学院を卒業した人には、どちらかといいますとプロジェクトマネジメントのプロ、10人、50人、100人を率いていくプロジェクトのリーダーになるような人というような目で見えております。もちろん技術がなくてはだめですけども。

高専の方に関しては、技術のプロになっていただきたい。この技術はおれがこの会社で一番だというような、技術のプロの方になっていただけるような方を選ばせていただいている。そういう意味で、貴学のほうに期待をすることは何かというと、やはり技術のプロになりたいなというような人を育てていただきたい。どこかにとんがった人間になっていただきたいなあと、そういうふうな人がいるといいなあと考えております。

実際の物に触れて、制御のプログラムでいいのですけれども、それを使ってロボットを動かしてというようなことをやってきてくれるのは大変ありがたい。そういう技術のプロになってほしいなあと考えております。それが1つ目。

2つ目は、先ほど女子の話が少しございましたけれども、私ども会社全体としては、採用の女子の比率は少なくなっております。能力だけで合格を出せば4割からもうちょっといくかなあというふうに思っております。実際成績はいいです。ですが、残念ながら、やはり家庭を持つということはハンディがございます、実際には多くの方がやめられていきます。これは私どもの責任もあり、いろいろな手は打っております。例えば、在宅勤務制をやってもいいよとか、短時間勤務もやっております。それでもやっぱりやめていきます。それは何故かといいますと、大学を出た方は女性も男性もすべてチームのリーダー、プロジェクトのマネジャーになることを期待するものです。

から、簡単には休めない。責任があるとなかなか休めないですね。女性がどうしても働きにくい職場かなあとと思います。ですが、先ほど言いましたように、技術のプロでありましたら自由に働けるのです。ですから、多分これは女性に向いていると私は思っています。家庭を持ちながら一生働ける仕事でございます。そういうPRをしていただけるとありがたいなあと考えております。

それから、先ほど英語力というのがございましたが、私どもの親会社はトヨタ自動車でございますけれども、ここは完全にグローバル化で世界中あちこち行くわけでございますけれども、私どもの会社も世界に今出ていっております。世界で働くチャンスがやっと去年あたりから、大変少ないですが、1,000名の社員に対して4名海外駐在をしております。これからどんどん増やしていこうとしています。仕事そのものは既に海外の会社と一緒にやっております。今は中国の幾つかの会社と仕事をしています。この次はベトナムで、今やり始めました。東南アジア系がどんどん増えていくと思います。語学、あるいは海外の文化に触れることが必要です。先ほど研修をやっておられると、大変いいことだと思えました。私どもの社員も海外研修を今やらせておりますけれども、貴学でもぜひどんどん続けていっていただきたいなと思えます。

最後にお願いという形を少し述べさせていただくと、本当は高専の卒業の方で、大学へ行かずにそのまま就職していただける方を、実はもっと採用したいのです。もとの定員数が少ない。あるいは、就職を希望される方が少ないということですが、例えば、私どもの仕事をやっていることを貴学の皆さん方に御紹介するとか、そういうような機会を持たせてもらったりだとか、会社に来てもらって見てもらうということも含めまして、いろいろやれることをやってみたいと思います。なるべく就職をしていただける方を増やしていただけたらというのが1つの希望でございます。

2つ目は、私の会社はITの世界でございますが、この世界は実は1人の力でいいことができます。車は、何人かの間人が一緒にないといい車はつくれませんが、ITの世界は、1人でもすばらしいものができます。学生の皆さんにすごいことができるぞと夢を持たせていただきたい。10年後、おれは世界でこんなふうに活躍したいんだという夢を持っていただくような、そんなことをしていただけたらなあと思えます。それが2つ目のお願いです。

以上でございます。

(江崎渉外担当主事)

ありがとうございました。

電子情報工学科長の伊藤先生、いかがですか。

(伊藤電子情報工学科長)

電子情報工学科長をさせていただいております伊藤と申します。

貴重な御意見をありがとうございます。実は今年、私どもの学科から1名の女子学生が内定をいただいております、ありがとうございます。10年後の世界でこんなことをしたいということを思えるような発想をつくらうとして、先ほど副校長の桑原先生が、創造工学で自分たちでゲームを考える授業ということを言われました。例えば、ヘッドマウントディスプレイですとか、AR技術を応用したアプリケーションなどを学生自ら作成しております。

(高橋校長)

御意見ありがとうございます。

高専で養成すべき人材というのが、やっぱり大学とは違うというふうに私も整理したいと考えておりました、実は地域の中核的教育機関というのは、地域の中心になるんだという大それた考えではなくて、やっぱり技術者養成という形では大学にも負けない、そこはしっかりやると。その後に企業に行くということもあるし、その後大学に行くこともあるでしょうけれども、基本的な技術はここでしっかり身につけさせましょう。時としてとんがってくればいいのですけれども、みんながみんなとんがれるわけではないかもしれません。ただ、そういうきちんとした技術力はつけていくということが中核にあって、そういうような教育機関として、きちんと地域で役割を果たしていこうと。従来の中堅技術者の養成という意味ではなくて、考え方を整理したいというのが、きょうお示した使命の意図でありますので、そういう御提言は私にとっては大変ありがたいと思っております。

それから、コミュニケーション能力であるとか、リーダーシップであるとか、最近、技術者養成については何から何までスーパーマンでなきゃいけないような風潮がありますけれども、やっぱりおっしゃるように、そういうのは会社にとって、行ってからという会社もあるかと思えます。だけど、そのベースになるようなことはある程度しっかりやっていきたいというのが1つです。

それから、コミュニケーション能力という意味では、側面が違うんですけれども、企業と学生とのコミュニケーション、これは私は絶対大事だと思っております、社長さんのところでぜひ学生にそういう機会を持っていただければ、大変ありがたいと思っております。

(江崎渉外担当主事)

よろしいですか、高橋先生。

吉見様のほうから、企業の視点ということで御意見をいただきましたけれども、少しこのあたりで視点を変えてみまして、鈴鹿高専の使命として、地域と連携した地域貢献等が言われておりました、それを積極的に進めなくてはいけない立場にあるんですけれども、地元鈴鹿市という視点から、鈴鹿高専への評価とか、期待とか、御意見が

ありましたら承りたいと思いますけれども、末松市長、よろしく申し上げます。

(末松委員)

地元市長の末松でございます。今日はこの会議に参加をさせていただき、今まで皆様方の御意見、お話を聞かせていただいて、いい機会をいただいたなと感謝を申し上げたいと思います。高専さんだけに限らず、この地域全体、また私たちの政策や市民サービス向上というところにも非常につながっていくのだと感じさせていただいております。

今、地域の中でおつき合いをさせていただいたり、あるいは地域で活躍をしていただいている方たちに、高専卒業の方が多くいらっしゃいます。先ほどの資料の中にもあったように、旭化成さんだったりとか、それから中部電力さんもそうですけれども、市内の中小企業さんの中にも高専を卒業された方たちが御活躍をいただいております。また、鈴鹿市には高橋先生にも入っていただいております、本市で工場を持っていただいたり、事業展開をしていただいている企業の皆さんと組織しております「鈴鹿工業クラブ」というものがあります。その中に学校機関も入っていただいています。その会の中で意見交換をしたり、あるいは技術交換というようなものをしていただいています。そこで御活躍されている方たちも高専の卒業の方が非常に多くいらっしゃいますので、そういった中で、しっかりと地元に基づいていただき、技術的な指導をしていただいています。そのようなことも含め、さすが50年、ここで50周年ということだなと感心しております。

また、鈴鹿市の産学官連携の中でも、高専の先生方、指導者の先生方、あるいは学生さんたちにもお世話になって、いろいろな研究や実践的なものを作らせていただいております。その点でも非常に大きな役割を果たしていただいていると思っています。

もう20年以上前でございますが、自分の高校進学のときを振り返って見ると、私たちの周りで、それこそ女子生徒というのはほとんど高専に入学をしなかったです。男子生徒ばかりが入学をする中で、女子生徒が学校に1人いたか、2人いたかというぐらいだった時代から、大分、年月を経過して、今日は鈴鹿市の中学校の卒業式とさっき熊谷先生がおっしゃられましたが、うちも今日娘が卒業式だったのですが、今はクラスに1人か2人、高専へ進学するという女子生徒が増えてきました。この大きな違いが随分あるのかなと感じています。その中で、理系の先生たち、女性の先生たちがいろいろ頑張っていて、先ほどの理系の卵たちという委託事業の中で、中学生、高校生に向けて理系というものはこういうものだよという、すばらしさを実践していただいているところも、女子生徒の進学意欲にもつながってきているのではないかと思いますので、そういった意味でも頑張らせていただいているなと思います。

ここにずっと私も住んでおりますので、昔は鈴鹿高専というのは、どちらかというところクローズなイメージがありました。専門的な学校でありますし、普通高校とは違って

技術を取得し、高専に5年行ったらしっかりと就職ができるのだという意識の高い子が進学をされていました。特別な学校という印象がありました。しかし、ここ十数年は地域へ「ものづくりの技術をしっかりと教える、工業・産業界のリーダーになる人材をしっかりと育てる」学校であると発信をして頂き、地域の中で認知度も上げて地域との連携も十分図ってもらい非常にオープンになったと思っています。

そういう面で、先ほどお話したみたいな産学官連携であったりとか、工業クラブに出ていただいたりとか、あるいは文科省の委託事業も受けていただいて、本当にいろいろなところに率先をして出向いてきてくれる、そういった学校になっていただいている中で、鈴鹿市としては欠かすことのできない、頼りにしている教育機関です。ここでしっかりとした技術職のリーダーを育成していただきたいと思います。また、鈴鹿市の政策の一つとして、来年度三重県と協力して取り組んでいく総合特区構想の中でライフイノベーションの総合特区の申請を三重県が行います。そのコアになるのが鈴鹿市だというふうに言っているのは、まずこの鈴鹿高専があって、医療科学大学がある鈴鹿市だからこそ、ライフイノベーション総合特区のコアになれるというようなことも言っていておられますので、その部分でぜひともこれから私も行政と、できる限り一緒になって、このような鈴鹿市全体の政策にも参加をしていただきたいと思っていますし、参加をしていただくべく学校だと思っていますので、学生さんをしっかりと育てていただきたいと思っています。

その一方で、先生方にもそういった知識の知財の分野でも、ぜひとも御尽力をいただきたいというのが、私からのお願いでございます。なおかつ市内の就職先の定着率が悪いとお聞きしましたが、せっかくすばらしい学生をつくっていただいているので、何とか私たちも協力をしていながら、少しでも鈴鹿市に残っていただけるような就職活動にも結びつけていきたいと思っていますので、今後ともまたそういった情報交換、情報共有していながら、やっていきたいなと思っています。

学校でありますけれども、いろいろなところに学生と先生方が率先して出向いていただいて、いろいろなところで情報を発信していただいているということが、成果に非常に繋がっていると思いますし、鈴鹿市の元気につながっていると思っていますので、今後ともよろしくお願いをしたいと思います。

もう遅いですが、もう一回私も入学したいような魅力がある学校なんだなということを改めて感じさせていただきましたし、保護者の一人として、もっともっと保護者説明会とかそういうところで、丁寧に御説明をしたり、丁寧な話をしていければ、BじゃなくてAを書いて、成績がトップクラスのお子さんたちが増えていくのではないかなど、話を聞かせていただいて思いました。今後ともどうぞよろしくお願いいたしますと思います。

(江崎渉外担当主事)

どうもありがとうございました。

鈴鹿市長に入学していただけますと、女子学生の志願者数が一気に増えるのではないかと思います。

(高橋校長)

ちょっと一つだけ。先ほどのミッションで、地域の中核的教育機関というのは、私どもは地域への貢献ということではなくて、私どもの本来の仕事としてそうあるべきだということ強く表明しようということでもありますので、これから鈴鹿市と一生懸命、そういう方向に向かってということで、大変ありがたいお話であったと思います。ありがとうございました。

(江崎渉外担当主事)

どうもありがとうございました。

それでは、もうあと時間も少々でございますけれども、本日、委員として参加していただいております銭谷様、文科省の元事務次官のお立場ということで、教育政策、あるいは学校制度全体から見た今後の高専のあり方というような観点から御意見をいただければと思います。

(銭谷委員)

私、今、東京国立博物館におります銭谷と申します。

高橋校長とは同郷でして、秋田の生まれです。そういう御縁と、それから昔、30年ぐらい前に三重県の教育委員会で仕事をしたことがありましたので、参与にさせていただいたのかなと思っております。

今日は、校長先生から大変わかりやすい御説明をいただきまして、ありがとうございました。鈴鹿高専の今の状況、特に高専として意欲的な取り組みを行っている状況がわかりまして、大変心強く感じた次第であります。ありがとうございました。

また、参与の4人の先生方からも、大変示唆に富んだお話をいただきました。特に、今日は「女子力」というのが非常に話題になっていますが、吉見社長のところとは違いまして、私どもの博物館ですと、学芸員の募集をしますと圧倒的に女子が多くて、優秀です。最近の若手の学芸員はトヨタと反対で、7～8割ぐらいは女子という時代になっております。科学技術の分野もやがて女子の方がどんどん進出してくれるのではないかなと思います。そのための産休・育休といったこと条件整備も図っていかないといけないと私としては思っております。

私なりの感想を言いますと、アメニティー（快適性）というのはこれからの学校にとっては大変だと思います。学校というと、何か施設は悪くとも、例えば、冬は寒風が

吹きすさぶ中、夏は冷房のないところで一生懸命勉強すればいいんだという感じですが、それはもう古い、間違った考えだと私は思っています。教員の方や学生がいい環境で学習できるというのがこれからの学校教育の場じゃなきゃいけないと思っています。アメニティーを含めたキャンパス計画というのは、ぜひ高専としてもお考えになってもらえたらと思います。お金がかかりますけど、必要なことだと思います。

率直に言うと、日本の場合、大学や高専は、ただ建物を建てればいい、敷地が広ければいい、校舎がいっぱいあればいい、1人当たりの面積が大きければいいということであつた感じがします。これからは快適で効率的な、心地よい空間をつくっていくキャンパス計画を、ぜひ提案をして、また必要な経費も確保していくようにしないとイケない。これは高専機構の責任でもあり、また文科省の責任でもありますが、是非やっていかないとイケないと思います。もっと申し上げれば、国立大学全体としてみた場合、立派な私立大学に比べるとキャンパス計画がおくれている面もあると私は思ったりもしております。それが1点です。

2つ目を申し上げますと、さきほどの校長先生の説明の中に教育体系と高専というグラフがあつたと思いますが、やはり「接続」というのを非常に高専教育では大切にされておられるのが大変いいと思います。今、教育全体では、例えば幼稚園と小学校の接続とか、小学校と中学校の接続とか、中学校と高校の接続とか、高校と大学の接続とかが、うまくいかないケースが多くみられます。中学校と高校の接続ですと、もう接続じゃなくて中高一貫にしようとか。今、小学校と中学校を一緒にして教育しようという動きも出ています。高専は基本は5年制で、高校と大学の一部が一緒になっている。この5年制のメリットや、さらに専攻科が十数年前にでき、制度化されたわけですので、専攻科をやると7年一貫教育というのができるわけですから、この5年、7年という長期期間を生かしたカリキュラムをつくって、その特性をより生かすということをもっと前面に出していてもいいのではないかという感じがいたしました。

しかも、その先5年から大学の学部に行ったり、7年終わったところで大学院に行ったり、コースとしては色々な行き方があるわけです。とにかく1つのキャンパスで5年あるいは7年、一貫した教育ができるというメリットをもっと打ち出していいのではないかという感じがいたしました。

なぜそういうことを言うかといいますと、通常でいくと15歳から20歳、あるいは15歳から22歳までというのは一種の青年期に当たるわけです。もちろん理工系の学校ではあるわけですが、文系、理系問わず「青年期の教育」というのができる、いい教育機関であると思うからです。

青年期の教育というのは何かというと、結局「人生をどう生きるか」と、どういうキャリアをつくって、どういう働きを自分はして生きていくのか。人間は働いて生きていくわけですので、そのことをこの5年間、7年間でじっくり考え学ぶという、キャリア教育の場として最適なところじゃないかなと思ったりもしております。もっとも

っと5年一貫、7年一貫というのを打ち出してもいいのではないかなあという感じがいたします。

と言いますのは、あるとき私の秘書さんが結婚することになりまして、結婚式に出たら、相手の方が高専を卒業して豊橋の技術科学大学の大学院を出てNECに入った方で、大変いい青年でした。その新郎や友人の方が、高専と豊橋技術科学大学のときの話をする中でいかにすばらしい学園生活を送ったかというのをお話しされたのが非常に印象に残りました。5年制、7年制の学校としての青年期教育というのをぜひどんどん売りにしてもらったらいいんじゃないかなあという感じがしました。鈴鹿高専自体は、先ほど校長先生のお話にもありましたが、高専の12校の1期校の一つですし、しかも今も偏差値が非常に高い、入試の競争率も高い、専攻科も多分全国で2番目だったと思いますけれども、早目にできたという、高専の中ではある意味では優等生なわけですから、その鈴鹿高専がさらにパワーアップしていただければ非常にありがたいなと思います。

最後の3点目で、これはもう皆さんが検討されていることだと思いますけれども、世の中大分変わってきていますので、学科までいくかどうかわかりませんが、例えば自然とか、環境とか、エネルギーとか、あるいは生命科学、あるいは国際協力といった、これからの日本の進路にとって、将来にとって大事な分野を、学科までいかななくても授業の中で強制的に取り上げるとかしてほしいと思います。特に防災ですね。東京より東のほうは、実は毎日地震が来ているような感じです。防災教育というのが今教科にしようかという動きもあるぐらいでして、地震、津波などの災害を考え、安全に皆が生活をし、災害に備える防災教育の必要性が今言われております。そういったことから、さっき申し上げました自然とか、環境とか、エネルギーとか、生命科学、国際協力に加えて防災といったような観点からの授業も展開していただけるとありがたいなという感じがいたしました。

いずれにいたしましても、きょうはお伺いして大変よかったなと思っております。意欲的なお取り組み、またいい参与の先生方のアドバイスもお聞かせいただきまして、大変勉強になったなと思っております。今日はどうもありがとうございました。

(江崎渉外担当主事)

どうもありがとうございました。

いろいろそれぞれのお立場から御意見をいただきましたけれども、そういう立場を超えてでも結構でございますけれども、この際、ぜひこれだけは言っておきたいというようなことがもしございましたら、御発言いただければと思いますが、よろしいでしょうか。

〔発言する者なし〕



どうも活発な御質問、御意見をたくさんいただきまして、ありがとうございました。予定の時間がちょうど参りました。本日の参与会議はこれで終了させていただきたいと思えます。

最後に、高橋校長から閉会に当たりまして挨拶を申し上げます。

(高橋校長)

それでは、今日は参与の皆様、それぞれのお立場で大変お忙しい中を貴重なお時間を割いていただきまして、ありがとうございました。いただきました御意見、実は高専も50年で、もう高専の役割が終わったのではないかというような話をされる方もおられまして、今日そのような話が出たらどうしようかとちょっとびくびくしておりましたが、基本的にはこれからしっかりやっていけよというような励ましと受けとめさせていただきまして、これからの学校運営に努めてまいりたいと思えます。

いずれにしても、社会に貢献できる学校ということを目指していきたいと思っておりますので、これからもさまざまな場面でお教え願ひ、助言いただければと思っております。よろしくお願ひしたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

(柴川総務課長)

以上をもちまして、鈴鹿工業高等専門学校参与会を終了いたします。

参与会議報告書

平成24年6月発行

独立行政法人国立高等専門学校機構

鈴鹿工業高等専門学校総務課

〒510-0215 鈴鹿市白子町

TEL:059-368-1701

FAX:059-387-0338

URL:<http://www.suzuka-ct.ac.jp/>